金属を→作品に→変える→旅→の記録

東京都現代美術館
ワークショップ 2022
記録冊子

MUSEUM OF CONTEMPORARY ART TOKYO
東京都現代美術館

講師プロフィール

勝木 杏吏（彫刻家）

2015年に多摩美術大学大学院を修了、主に金属を用いて作品を作る。美術教育の仕事に携わりながら、野外彫刻や壁掛け彫刻を手掛け、並行して個展やグループ展を重ね制作活動を続けている。近年は、金属の表面を磨いた後に独自の手法で藍色に輝かせた“藍染シリーズ”を主に発表している。

オフィシャルサイト www.anrikatsuki.com

この旅について

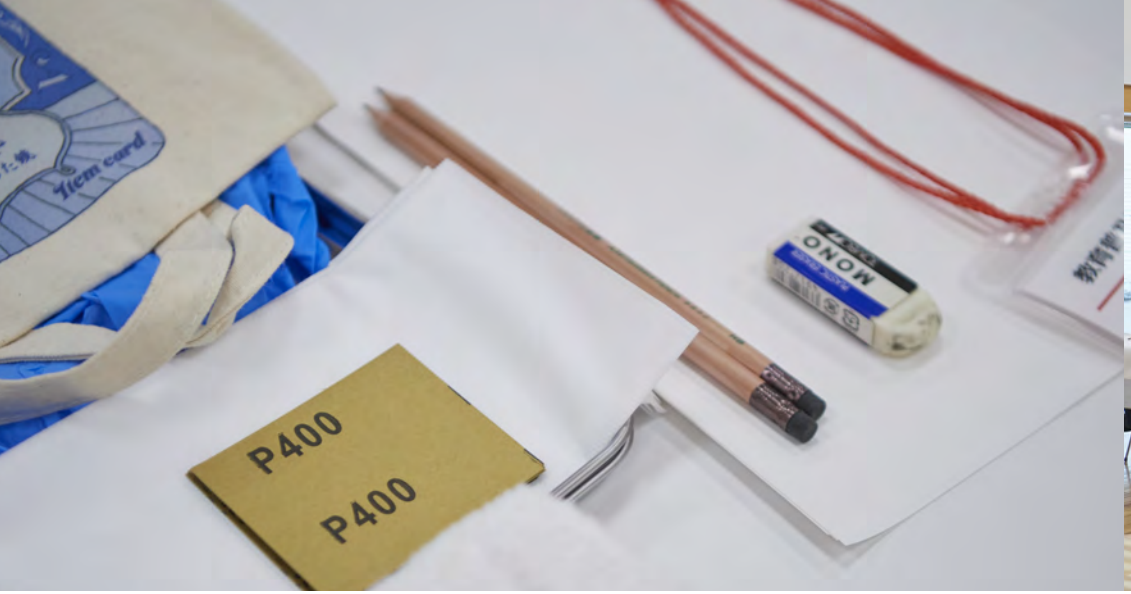
美術館から初めてお誘いいただいた時に「勝木さんの作品は、見ているだけの時と実際に手に取った時とで大きく印象が異なった。デジタル化している時代に、このような実感のある仕事をしている方と是非一緒に何かをしたい」とおっしゃっていただき、ちゃんと見てくれている人がいるのだと嬉しく思いました。

その事を基に作品を“見る”体験に加え“触る”ことで、参加者がより自分の感性と向き合う事ができるのではと思い、私の作品と美術館の金属作品を見比べたり触りながらの鑑賞体験と、金属の表面処理による見え方の変化を体感する磨きの体験を行う事に決めました。私の作品は抽象的なので鑑賞者は色んな視点を持って見てくれるので、その視点を見つける旅に出るというイメージで“金属を作品に変える旅”というタイトルを付けました。感性はそれぞれ違い、それぞれが感じたことが尊いということをこの旅を通して改めて感じました。

もともと私が抽象作品を作るようになったのは、できるだけシンプルな形状にすることで思考を限定せず、作品と鑑賞者に多くの対話をしてほしいという思いからでした。なんだかよくわからない、という対話だとしてもその表情が深い海のような作品に映り作品の一部になります。例えば今回鑑賞した美術館常設の金属彫刻は、台座がなく人が自由に触れたり中に入れる状態にあり、興味がなく鑑賞していた人も作品のスケールを表すものになり、作品の一部のようにもなります。私の作る壁掛け作品や野外彫刻も同じで“作品”として一部が切り取られるのではなく、壁掛け作品は剥き出しで壁の中に自由に配置され、野外彫刻は台座がなく人が近づけ、時間や光や見る人の変化によって無限の広がりを見せてくれます。鏡面は私が非常に大事にしている表面処理なので、今回参加者の皆さんに金属の鏡面を作ってもらうことで、より作品の広がりを感じることができるワークショップになったのではと思います。

最後になりますが、この旅を皆さんと一緒にでき、最後に記録冊子で皆さんの感性に触れられたことに胸がいっぱいです。特別な自分だけの感性と共に、これからも色々な旅をしていきましょう。

勝木 杏吏（彫刻家）



概要

今回のワークショップでは、金属素材を使って作品を制作している
彫刻家の勝木杏吏さんを講師にお迎えし、実施しました。
私たちの身の周りには、多くの金属が姿形を変えながら存在しています。
それを確かめるべく、美術館の中にある金属作品を鑑賞したり、
実際に金属を磨く体験などを通して、同じ素材が持つ表情の変化を体感しました。
さらにワークショップ後には、自分で磨いた金属の作品を各自の日常空間に
連れていくことで、素材が作品となっていく過程を味わいました。

基本情報

Aチーム　日時：2022年11月5日［土］13:30〜16:30
対象：小学1〜6年生＋保護者のペア
参加者：8組

Bチーム　日時：2022年11月6日［日］13:30〜16:30
対象：中学生以上
参加者：8名

場所：東京都現代美術館 地下2階 講堂
参加費：3,000円（Aチームは1組あたり、Bチームは1名あたりの金額）

材料・道具

鉛筆	紙ヤスリ4種（#400・#800・#1000・#2000）	ステンレスバット
消しゴム	研磨剤（金属用）	磨いた水を捨てる容器
A4コピー用紙数枚	ウエス	ゴミ袋
講師の鉄作品（1組1つ）	使いすてゴム手袋	ぞうきん
アルミ板（1人1枚）	簡易エプロン	模造紙

当日の流れ

あいさつ ［5分］

金属のことを考える ［30分］　**講師の自己紹介**

講師である勝木さんから、ご自身の制作にまつわるお話や、金属という素材についての
お話がありました。その後には、参加者自身の身近な金属を思い浮かべて紙に書き出し、
少しずつ金属の世界に思いを馳せていきました。

金属を観察する ［50分］　**鑑賞**

講師の作品を手に美術館内を巡り、金属素材が使われている彫刻作品や
建材との表現の違いを見比べながら鑑賞しました。
鑑賞作品：アンソニー・カロ《発見の塔》、リチャード・ディーコン《カタツムリのように B》

金属（アルミ板）を磨く ［60分］　**制作**

4種類うち、主に#800・1000・2000の紙ヤスリで水磨きをした後、
ウエスを使いながら研磨剤でさらに磨いて鏡面にしていきます。

金属の表情を見比べる ［25分］　**制作物の発表、参加者同士の表現を鑑賞**

全員の作品を集めて、金属の表情の違いを見比べながら鑑賞しました。

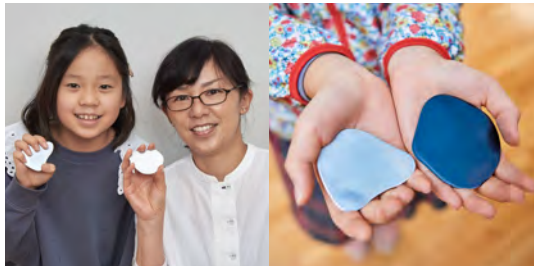
まとめ ［10分］

勝木さんから、一連の活動に対してのコメントを受けて終了。
かと思いきや、今回のワークショップはここでは終わらず、帰宅後にも
各自で取り組んでいただく活動があり、その説明（下記）を行った後に解散となりました。

ワークショップ後の取り組み　**展示**

**1）勝木さんの作品とワークショップ中に磨いた作品を、あなたの生活空間や、
お気に入りの場所に連れて行き、あなたなりの展示をしてください。**
2）1の風景を写真に撮り、タイトルをつけてください。
**3）2の写真・タイトルを、簡単なコメント（その場所を選んだ理由、展示をしてどう感じたか、こだわりなど）
とともにメールで送ってください。**

P5〜20で取り組みの一部をご紹介します。



Aチーム

タイトル

森で休けい

コメント

磨いた面に、葉っぱが写り込むように
角度を調整して置きました。

Aチーム

タイトル

宿題と鏡

コメント

よく使う自分の机で宿題をしているときに
撮ろうと思ったから。

Aチーム

タイトル

LEGOと遊ぶ

コメント

LEGOで遊ぶのが楽しいから

Aチーム

タイトル

だれのにくきゅうかな?

コメント

がんばってみがいたら、
ピカピカのかがみみたいになったよ。
これは、家でかっている犬のにくきゅう。
はっきりうつって金ぞくはすごいね。

Aチーム

タイトル

帰り道

コメント

家のすぐそばに小さな踏切があります。「ここを過ぎるともう家だな。早く帰ろう」と思いながら、夕焼けのなか、電車が通るのをぼんやり見入ってしまいます。金属なのになぜか温かみのあるやさしい作品を置いてみたら、わたしだけの大切な時間が切り取れた気がします。

Aチーム

タイトル

夏の記憶

コメント

刈り入れの終わった田んぼに展示しました。青く澄んだ秋空を映した金属を稲の根元に置くと、この水田が水を湛えていた、あの暑い夏の日が思い出されました。

Aチーム

タイトル

鉱物発見!!

コメント

一番好きなおもちゃのレゴと合体させた。
アルミをピカピカにできたのがうれしかったので、
レゴ人間の顔をうつしてみた。

Aチーム

タイトル

わたしのたからもの

コメント

今までに見つけた大切な石たちゴツゴツした石たち、ツルツルした石たちと一緒にしてあげたいと思ったからです。ゴツゴツした石の中に光る金属がキレイで、伝説のカギを発見したような気持ちになりました。より大好きなツルツルの石の中には勝木さんの作品を入れて、海の伝説のカギをイメージしました。

Bチーム

タイトル

青に移る秋

コメント

近所のお気に入りの場所で撮影しました。

Bチーム

タイトル

レンズ

コメント

金属は透明でした。

Bチーム

タイトル

海染魔境月染

コメント

とにかく光を反射すると美しかったので、何かいい光源はないかなと思ってたときに月が出ていたので、いろんな角度で光を拾ってる時間が楽しかったです。自分が磨いたアルミのほうでは出現しない線状の光が、勝木さんの作品ですときれいに浮かび上がるのでまさに魔境と思いました。

Bチーム

タイトル

擬態

コメント

今回作った作品をセメントブロックの上に置いたとき、まるで擬態しているかのように感じこの場所を選びました。

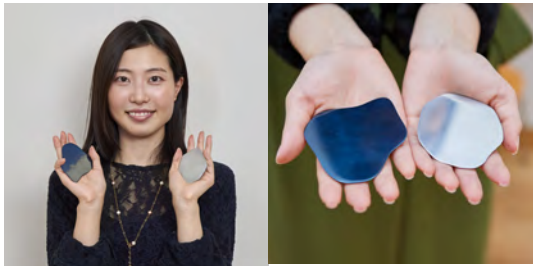
Bチーム

タイトル

共有する

コメント

私用でいつもの“お気に入りの場所”での撮影が叶わず。その代わり数日間常に持ち歩いて共に行動し、ささやかな“お気に入り”を写して見せてあげました。スマホで撮影すると、作品に映る風景と後ろの背景が一緒になってピントが合ってしまう。鉄なのに透けているようなところが好きな所です。



Bチーム

タイトル

少女は成長して
海を手に入れました。

コメント

勝木さんの作品の美しさはもちろん、手で持てる、持ち運べる海である、というところに最も心惹かれました。海のないところで生まれ育った幼少期の記憶が関係しているのだろうと考え、それを素直に表した写真を撮ってみました。

Bチーム

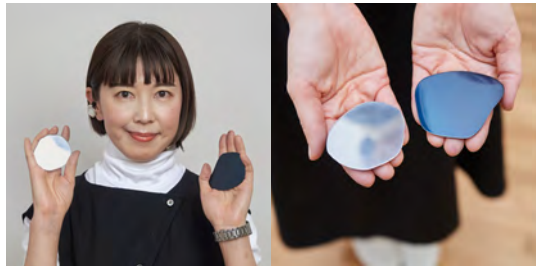
タイトル

空の描き写し

コメント

作品たちの形が好きでなぞってみました。

今日は晴れていて気持ちがいい空と光でした。



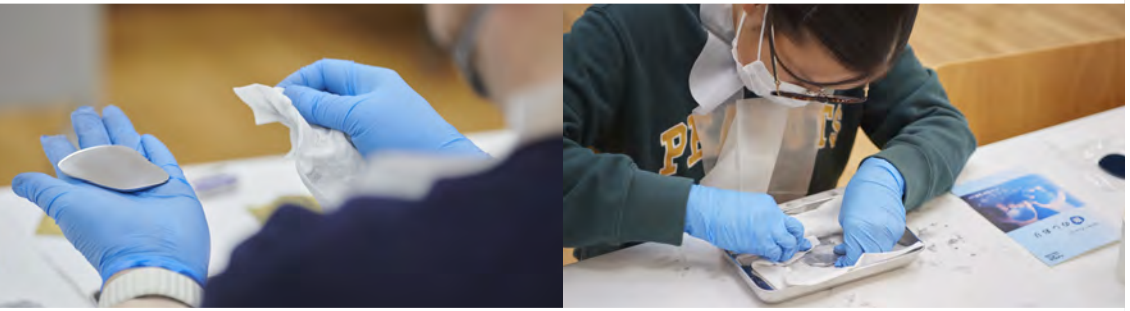
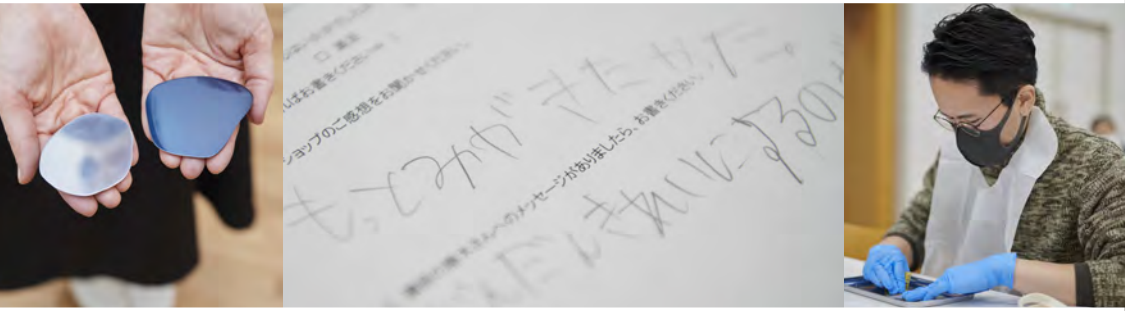
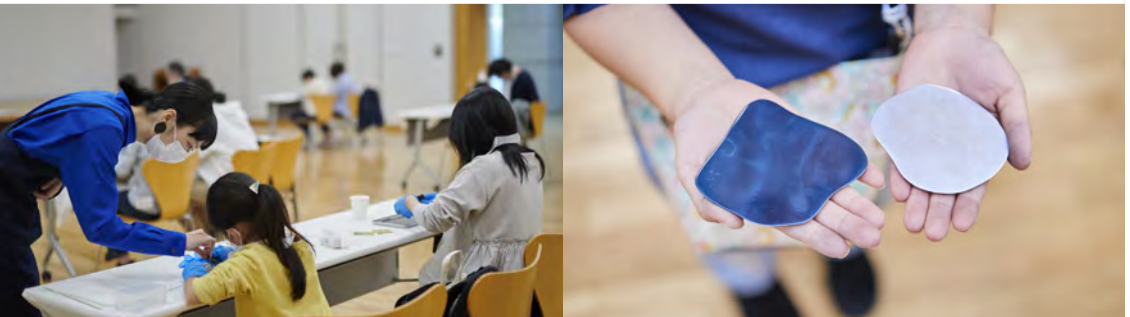
Bチーム

タイトル

ちょっとひと息つきましょう

コメント

お菓子を作ったり、食べたりするのが大好きです。もちろんお茶の時間も。お菓子を乗せる器は、お茶の時間をさらに楽しくしてくれる大切なアイテム。器は素材や用途にこだわらず、花器を使ってみたり、紙に乗せてみたり。でも、錆びてしまう気がして金属の器に乗せたことがないような?いただいた青の作品と、作成したアルミの作品はどちらも錆びにくそう。これはきっとお菓子が映えるはず。うん。やっぱり楽しい時が過ごせそう。

旅のおわりに

清々しい秋晴れの中、2日間のワークショップを無事に開催することができました。様々な地域から東京都現代美術館まで足を運んでくださった参加者の皆さん、ご参加いただきありがとうございました。

今回、講師としてお招きした勝木杏吏さんは、手仕事にこだわり、金属という物質に対して実直に向き合い続けている作家です。そんな勝木さんが生み出す作品といえば、近年では“藍染シリーズ”と呼ばれる作品群が代表的です。この“藍染シリーズ”に共通する深い青色の鏡面は、一見するとその素材が鉄であることにも気が付かないほどの美しさがあり、鑑賞者の目を一瞬にして奪ってしまう妙な説得力もあります。その色が、塗装されたものでも、色素によって着色されたものでもなく、バーナーの炎によって高温に熱されたことで表れたものであることを知った時、作品への関心は一層強く引き起こされることでしょう。金属素材を切り出し、磨き、熱を入れて色付けする。言葉にしてみると極めてシンプルな工程にすぎませんが、その工程は紛れもなく「素材」を「作品」へと変えていく過程なのです。そのシンプルな過程について考えてみたいという思いから、今回のワークショップの企画は立ち上がりました。また、打ち合わせを重ねる中で、勝木さんから「人の生活空間の中で活きる彫刻を作っていきたい」という言葉をうかがった時、このワークショップも美術館の中だけで完結することのない、余韻ある内容にする必要性を感じました。そういったことを様々にふまえて企画されたのが『金属を作品に変える旅』です。

ワークショップの中で流れていた時間は、一素材が作品へと変化していく過程を緩やかに、そして丁寧に辿っていくものでした。一体「作品」とはどんなものなのか、その作品を生み出す「作家」とはどんな存在なのか、作品を「展示する」ということはどういうことなのか。今回の一連の旅を通し、参加者の皆さんがそれぞれの尺度でもって考えを巡らせていただけたなら嬉しく思います。

荒井 美月（東京都現代美術館 教育普及係）

金属を→作品に→変える→旅→の記録

東京都現代美術館 ワークショップ2022
「金属を作品に変える旅」の記録

執筆・編集：勝木杏吏
荒井美月（東京都現代美術館）

撮影：森田直樹
デザイン：北川正（Kitagawa Design Office）
発行日：2022年11月30日
発行：東京都現代美術館
〒135-0022 東京都江東区三好4-1-1

©2022 東京都現代美術館　禁無断転載　非売品